

穀物メジャーと農産物貿易（久野秀二）

キーワード — ○穀物メジャー／○事業多角化／○垂直的統合／○世界農産物貿易／○先物取引

用語解説 — 先物取引

推奨文献 — 茅野信行『アメリカの穀物輸出と穀物メジャーの発展』中央大学出版部、2006年／ブルースター・ニーン（中野一新監訳）『カーギル：アグリビジネスの世界戦略』大月書店、1997年

◎穀物メジャーの機能

穀物メジャーは穀物流通の担い手として、生産者から小口で集荷・保管した穀物を大口の規格品として商品化し、内陸（鉄道、水上）輸送および海上輸送の大型化によって価格競争力を強めながら、年間を通じて世界市場へ大量に輸出することで大きな流通マージンを取得する。こうした穀物取引を行う商社、とくに表*に示したカーギル社、ブンゲ社（米語発音はバンギ）、ADM社、ルイ・ドレイファス社等が穀物メジャーと呼ばれる所以は、産地のカントリー・エレベーターから河川沿いのリバー・エレベーターや集散地のターミナル・エレベーターを経て、大型船に積み込むポート・エレベーターに至る穀物貯蔵・調整施設や物流手段の高い占有率と、北米・南米な

ど穀物輸出国の生産動向、欧州・東アジアなど穀物輸入国の市場環境や需要動向に関する圧倒的な情報収集・分析力にある。米国内の穀物処理能力ではカーギル、ADM、ブンゲの3社で4割に満たないが、米国産トウモロコシ輸出では8割を占め、大豆搾油能力では世界全体で7割近くに達するとされる。

穀物メジャーが取り扱う農産物は、後述する事業多角化を通じて、小麦やトウモロコシから大豆・菜種等の油糧作物、綿花、コーヒー、カカオ、オレンジ等に広がっており、さらにそれらを原料とした配合飼料や加工食品原料（食品添加物や事業者向け半加工品）、エタノールや工業原料の製造・販売にも事業を拡大している。カーギルやブンゲのように化学肥料部門に力を入れている企業もある。

表 主要穀物メジャーの概要

	Cargill, Inc.	Archer Daniels Midland	Bunge Ltd.	Louis Dreyfus SAS	Noble Group Ltd.
本社	ミネソタ州 ミネアポリス	イリノイ州 ディケーター	ニューヨーク州 ホワイトプレーンズ	フランス・パリ (商品事業部はオランダ)	香港
創業年	1865年	1902年	1818年	1851年	1986年
資産	n.a.	370.6億 ^{ドル}	202.3億 ^{ドル}	n.a.	81.5億 ^{ドル}
売上高	1,204.4億 ^{ドル}	698.2億 ^{ドル}	525.7億 ^{ドル}	200+億 ^{ドル} (商品取引事業のみ)	306.9億 ^{ドル} (農業関連は99.1億 ^{ドル})
純利益	39.5億 ^{ドル}	18.0億 ^{ドル}	10.6億 ^{ドル}	n.a.	5.8億 ^{ドル}
従業員	159,000人	27,600人	24,800人	12,000人	4,800人
事業拠点	68カ国	58カ国	30+カ国	53+カ国	40+カ国
事業部門	農業サービス/農産物流通加工(穀物・油糧作物、綿花、砂糖)/事業者用食品原料(畜産物、カカオ、食用油、添加物)/リスク管理・金融/工業(塩、鉄鋼、潤滑油、肥料)	油糧作物加工(搾油、ディーゼル)/トウモロコシ加工(甘味料、澱粉、エタノール)/農業サービス(集荷、販売、輸送)/その他(小麦、カカオ、モルト、金融)	農産物取引加工(穀物・油糧作物の調達、輸送、加工)/肥料(南米肥料事業、精密農業)/食品加工(食用油、事業者用製粉・小麦製品)	商品取引(穀物、油糧作物、砂糖、柑橘、エタノール、コーヒー、綿花、米、船舶輸送)/エネルギー(天然ガス、石化製品)/不動産/新規多角化事業(配電、バイオマス)	農産物取引(小麦、トウモロコシ、大豆、コーヒー、カカオ、砂糖、綿花、肥料)/鉱物資源/エネルギー(石炭、原油、エタノール、石化製品)/物流、リスク管理・金融
事業展開	カーギル—既存企業の買収等を通じて、1979年に牛肉加工事業、80年にコーヒー事業、81年に繊維取引加工事業、87年にカカオ事業と豚肉加工事業に進出。98年にコンチネンタル・グレイン社の穀物取引事業を買収。04年に合弁肥料子会社モザイク社を設立。最近では、90年ポーランド、91年ロシアを皮切りに移行経済圏での事業展開が顕著、05年からは黒海沿岸地域への投資を強めている。 ADM—1970年代後半からエタノール事業。80年代は米国内の地域農協や穀物油糧作物加工企業の買収で急成長。94年にアジア事業(中国事業の拡大は2000年以降)に乗り出し、ブラジル進出は97年で、03年には南米全体へと事業を拡大。 ブンゲ—もともと南米に強かったが、1997年に南米事業を拡大し、現在では南米最大の肥料企業、大豆加工企業、大豆・大豆ミール輸出企業に。00年には中国事業所を開設し、数年後には中国最大の大豆輸入業者に。03年にはインド市場、04年以降は東欧・CIS諸国で事業を拡大。				

資料) 各社年次報告書およびウェブサイトを参照。経営指標は2007/08年のデータを用いた。

◎世界農産物貿易と穀物メジャーの事業戦略

穀物・油糧作物の地域別輸出入量と主な貿易ルートを示した図*にみられるように、世界農産物貿易構造は農業資源の偏在を反映しており、それゆえに穀物メジャーの事業が成立するのだともいえる。主要な流れは、北米から世界全体とくに日本を中心とするアジア諸国へ、南米から欧州諸国やアジア諸国へとされており、欧州では域内取引の割合が高く、北米とアジアでも域内貿易が活発である。

穀物メジャーは北米（一部は南米）を拠点に穀物取引事業を展開し、とくに1970年代の穀物増産・輸出政策の追い風を受けて急成長を遂げてきたが、1980年代の米国農業不況を契機に事業再編を本格化させ、一方ですでに進行していた事業多角化すなわち穀物取引から広範な農産物取引へ、穀物加工から食肉加工・食品加工へと事業を拡大し、他方で市場統合を見据えて欧州地域へ、穀物供給基地として期待されていた南米地域へ、そして経済成長によって食糧需要の増加が見込まれていたアジア地域へと事業を拡大していった。最近では、東欧や黒海沿岸地域への進出が目立っている。

穀物メジャーはこのような水平的、垂直的、地理的な事業統合化を通じて、世界農産物貿易で圧倒的な市場影響力を有する存在であるが、それでも現物取引に市場価格や為替レートの変動リスクは避けられない。そのためシカゴ商品取引所等での先物取引によってリスクヘッジを行っている。その先物市場もまた、近年ではリスクヘッジではなくキャピタルゲイン（売買差益）を目的とした投機資金の流入によって攪乱されている。だが、世界食料危機とも呼ばれる2007/08年の穀物価格乱高下を通じて明らかになったのは、リスク管理と金融取引に精通した穀物メジャーが、さらに農産物のグローバルな調達・取引と一次加工、事業者向け食品加工との垂直的統合によって取引費用の節減効果を存分に発揮しながら、価格高騰時も価格下落時も一貫して農業関連事業の利益を上げてきたことである。例えばカーギルは2008年度（07年6月～08年5月）に純利益が前年比69%増、ブンゲは同じく（07年7月～08年06月）37%増となった。だが、同じ時期に世界の飢餓人口が増加し、各地で食料高騰をめぐる暴動が頻発していた事実を忘れてはならない。（久野秀二）

